

「皆に尊敬される人になりたいです」彼は緊張した面持ちで言った。「尊敬されるって、どういう人？」「自分がないものを持っている…いや、優しい人かな？」「優しいって、どういうこと？」「雰囲気が大らかで安らげるっていうか…」

この先どうなりたいかという質問でのやりとり。何かがずれている。この先どうなりたいか。今の自分を見つめて、たとえば「学校に行かなくてもゆったりと自分に自信を持ってすごせる」「高卒認定試験を受けて大学に行く」などの、今の自分の状況をどうしたいか、というだけの質問なんだけど。質問の仕方がまずかったかな。不思議な現実感のなさを感ずる。

そもそも、尊敬される人になりたいって、高校生ぐらいになってきたら、気恥ずかしくて言えないんじゃないかな。誰に尊敬される？みんなに尊敬される？それって、単純に考えて無理なんじゃない？

いや、ここで問題なのは、彼がなぜそういうことを言い出すか、だよ。日頃から、誰かに尊重されたくても、されないわけ？もしかして、家族からも尊重されない？自分をもっと認めてほしいってこと？

それから、自分が持っていないものを持つて人になりたい？それって、今の自分に自信がないことの裏返しだよ。優しい人？これまたかなり抽象的すぎる。大らかで安らげる人？あ、なるほどね。これならちょっとわかる気がする。

動作法を行う。まずは、背中の「ペコポコ」をやってみた。彼の背中はとても硬くてカチコチだった。しかし、彼の取り組み方はすごかった。背中にたちまち汗がにじむ。Ｔシャツが汗で黒くなっていく。ほんの十分ほどなのに、息が荒い。「疲れました」これが第一回目だった。彼の体験の仕方は、真面目で一生懸命なのだ。そうして周囲の称賛を浴びて生きていきたい人なのだ。

第二回目。彼はある日突然襲ってきた「めまい」に苦しんでいた。もう一度、この先どうなりたいか

を聞いてみる。

「人によって、使い分けができる自分になりたいです。バイト先の先輩からは、可愛いやつと思われたい。学校の先生や仲間からはいいやつと思われたい。家族からも、いい息子と思われたい。悪い部分は見せない方がやりやすいです」

なにに、悪い部分は持つてるけど、それを隠していいやつだと思われたらいいこと？

「そうです。自然体のようにふるまって、実は自然ではない自分」うわ、混迷を極めてきた。あなたもしかして「複雑系」人間なのですか。ただ、悪くはない。一回目よりよほど現実的な答えだ。

動作課題は、立位の踏みしめ踏み分け課題。膝前出し立ち上がり課題。これらは、自分の重心をしつかり感じ、その都度バランスを取りながら、自体軸をしつかり保ちつつも柔軟性を保つことを目指している。もちろん、彼にはそんな説明はしない。またまた、真剣な取り組みの彼。終わったときには、「楽になりました」とにっこり。

◇ ◇ ◇ ◇

その後わかってきたこと。彼は、何にでも一生懸命取り組む人で、承認欲求も強い。母親の愛も欲している。ところが、母親からは容易に認められず、日常生活でかなり否定的な言動を受け続けていたことが判明。

母親に同席してもらって、それらを代弁して伝えるところ、彼女は全く無自覚無意識に行っていたということがわかってきた。そして、それらがすべて親の愛から生じていたことも。

かくして、親の愛とは、古今東西、まったくもって、子の思いから乖離していくことが多い。その愛のベクトルが少し変化するだけで、子どもは生き生きと蘇る。相談室に来る子たちの多くは、親の変化とともに変化していく。

「出願しました」高卒認定に合格し、行きたい大学を見つけ、出願を済ませた連絡をもらった。彼はけっこう、単純でわかりやすい人に変化した。体調良好、めまいもない。優しくて大らかな人になった気がする。え？このセリフ、どこかで聞いたような。